

エビデンスに基づく教育を読み解く —石井英真先生をお迎えして—

徳永 俊太
(京都教育大学)

はじめに

2018年度前期に行われた共通必修の授業「現代社会と学校教育」において、筆者は石井英真先生の論文「教育実践の論理から『エビデンスに基づく教育』を問い直す—教育の標準化・市場化の中で—」を4時間かけて読むことを試みた。そのねらいは、論文や本を読む速度を自分で調整する力を身につけることにあった。4時間かけて論文を読んだ後は、レポートとして、論文を読んで生まれた問いについて論述してもらった。その後、担当教員の中で、夏の教育研究集会に石井先生をお呼びすることはできないかという話が持ち上がった。石井先生にお伺いしたところ、快諾していただき、今回の講演会が実現した。読み込んだ論文の筆者と対話することは、自らの学びをさらに深めるまたとない機会である。

教育研究会では、石井先生に論文をもとに講演をしていただき、その上で各コース2名の院生に登壇をしてもらって、自分が持っている問いを中心に、石井先生と対話をしてもらった。登壇する院生は、授業のレポートを見て、徳永が選別した。

教育実践史とエビデンスに基づく教育とのつながり（講演要旨）

講演者は、アメリカの教育目標論（ブルーム）と日本の教育実践論（斎藤喜博）を研究してきた。エビデンスに基づく教育は、自分の研究履歴と密接に関連している。何故ならば、エビデンスに関する議論は、学力論ではなく、教師の専門職論や教育本質論として語られるべきだからである。

教育実践史において著名な実践家である斎藤喜博に対する批判を概観していくと、教育は技術として捉えられるものの、人間を対象にした技術としての固有性が見えてくる。教育技術の法則化運動を立ち上げた向山洋一は、斎藤喜博の技術が教師たちの間に共有されていないことを批判し、跳び箱をとばせる技術などを一般化した。しかし、これは道具箱を開発するようなものであり、そこには応答的に使いこなす主体の技（アート）という視点が欠落していた。

こうした歴史を参照すると、エビデンスに基づく教育に関わる議論を通して確認されたことは、個々の教師の判断が重要であるということだろう。もちろん、統計などのデータにも有用性はある。しかし、それは主として教育政策レベルにおける有用性であり、教育実践における有用性と混同されている面がある。

一方で、エビデンスに基づく教育に関わる議論の現代的な特殊性にも注意しておきたい。そ

れは専門職不信である。現代は、透明性の名のもとに専門職の判断よりも分かりやすさがもてはやされる。そのような状況の中で、学校や教師への信頼をつくっていくために重要なのは、目標論と評価論を学校現場が手放さないことである。

院生との対話

○授業力高度化コースの院生からの問い

石井論文で提起されているローカルかつ民主主義的な学校における子どもについて考えると、子どもの意見は学校に反映されているのか、反映されていないとしたら何が妨げているのか、はばむものとして教師がいるのではないか。

○石井先生の応答

生活指導の実践が学校への子どもの参画を支援してきたのではないか。ただし、子どもを子ども扱いすることにはメリットとデメリットが存在し、発達段階を考慮すべきだ。教師と子どもとの権力関係は、授業においても見ることができる。教師と子どもたちがともに教材と向かい合う関係性が成立している授業は、よい授業であることが多い。子どもと教材との間に教師が立ってしまうと、教師の考えていることを子どもが忖度するような授業になってしまう。

○生徒指導力高度化コースの院生からの問い

エビデンスは子どものためになっているのか。民主主義的に学校を運営する力を教員養成課程にどのように位置付けるべきなのか。

○石井先生からの応答

学力テストの目的は指導改善であるとよく言われるが、そうではなく次のカリキュラムの改訂のために行われるべきではないか。目的の迷走は、終わりなき競争を生み出す。目的と方法のミスマッチをなくす必要がある。集団ということ言えば、日本の教師は学級集団をベースに教えることにこだわってきた。創造的な一斉授業こそ、日本の教育の優れた特徴である。

○学校経営力高度化コースの院生からの問い

学校はなぜ受け身になってしまうのか。教育を語る言葉の少なさを感じる。どのようにすれば、現場を励ますようなエビデンスになるのか。

○石井先生から応答

日本とアメリカの教育の大きな違いは、専門職団体の不在である。アメリカなどでは、専門家集団による相互評価を通して、質保証が試みられている。学校の信頼をどう調達するのかで言えば、学校運営上は、具体的な子どもの成長の姿を保護者などと共有することが重要であり、校長の広報活動なども重要である。一般社会に発信をしていく場合は、ある意味でクールな言葉で語る必要がある。現場だけで通用する言葉では、一般世論に訴えることは難しい。

参考文献：石井英真「教育実践の論理から『エビデンスに基づく教育』を問い直すー教育の標準化・市場化の中でー」『教育学研究』第82巻第2号、2015年、pp.216-228。

大学院での学びを振り返って

宮崎 真之介

(授業力高度化コース第5期生)

1. はじめに

大学院を修了してから5年が経ち、いつの間にか年下の教師も増え、若手から中堅教師に近づいてきました。また、学校現場から教育行政の場へと転勤となり、学校現場とは異なる環境で日々の仕事をしています。直接、生徒たちに関わることはありませんが、「子どもたちに『幸せに』生きる力を育む」ことを目指し仕事をすることに変わりはありません。

今回、大学院を修了してから現在までを振り返る機会をいただきました。大学院で学んだこと、そして学校現場で学んだことについて振り返りました。

2. 大学院で学んだこと

大学院での一番の学びは、「理論と実践の融合」です。この精神を持ち続け体現することは、学校現場に出てからより一層、私の中で大切なものになっています。

「理論」については、連合教職実践研究科の授業を履修することはもとより、教育学研究科（社会科専修）の科目も履修し、社会科教育学について学ぶことができました。また、各研究会、学会等に参加し最先端の理論に出会うことができました。これらの経験を通じて、「社会科教育学」という芯を形成することができたことは、中学校での勤務を志望していた私にとって大変有意義なものとなりました。

「実践」については、教職専門実習が大きな学びとなりました。10週間の専門実習では、教職員が丸となって組織的に動くことの大切さや生徒との関わり方など、学校現場でしか知ることができないことを学ぶことができました。また、自主ゼミでの学びも大変有意義なものでした。社会科、地理歴史科、公民科志望の院生で組織し、模擬授業や研究協議をしたことは大変刺激的でした。

3. 学校現場で学んだこと

学校現場に勤務し学んだことは多くありますが、2つ述べたいと思います。1つは、生徒指導の難しさ、もう1つは、「理論と実践の融合」の「融合」の難しさです。どちらも、一筋縄で行かないからこそ学ぶことがあるのだと思います。

生徒指導の面で、私が一番苦労したことは、「望ましい人間関係づくりと集団指導・個別指導」です。望ましい人間関係をつくるためにも生徒指導の機能を生かした授業や教育活動が大切であることや、集団指導・個別指導するためにも生徒を十分にそして正しく理解することの大切

さを学ぶことができました。これからも、生徒一人一人に目を向け、心を使うことを意識し実践していきたいと思います。

「理論」を理解することと、それを「実践」できることは別物です。そして、それらが一体となった「融合」という姿は、遥か高みにあるように思います。しかし、その高みを目指し挑戦し続けていくことの大切さを実感しているところです。また、同時に、「融合」の姿に達するためには、一歩ずつ地道に焦ることなく歩み続けることが大切だと感じています。

4. おわりに

大学院での学びは、自分の芯となるものを形成し「あるべき教師像」を描かせるものとなりました。そして、学校現場での学びは、「あるべき教師像」に近づくための歩みとなりました。これからも日々「子どもたちに『幸せに』生きる力を育む」ことを目指し仕事をしていきたいと思っています。